

通史：半世紀のあゆみ

青春のパライストラ

一進一退

編集 部

1. 昭和52年（1977）・創部30周年

風俗・流行・歌 OL貴族・落ちこぼれ
／カラオケ／♪『青春時代』

劇作家の山崎正和が『不機嫌の時代』を書いたのは昭和51年のことである。それは、「人生を明快な自己主張として生きることもできず、むしろその内部の空洞を真摯に見つめることによって生きてる人間」の感情の崩壊状態と見做したものだ。山崎は、鷗外、漱石、荷風、志賀直哉を採り上げて、そこに一貫して観察できる「不安」の感情を、「近代的自我」を実感できないための、もどかしさ「不機嫌」として捉えたのである。ところが1977年の日本状況では「不機嫌の時代」という表現が時代相として浮上することになる。そのころアメリカでも「不機嫌の時代」の兆候が顕れていた。それまでのアメリカ人は、行き交う人びとが互いに、「ハーイ」などと声を交わしたり、ニッコリと「ウインク」を投げ合ったりして、陽気な場作りを誰彼なくしていた。そんな光景にふれて、旅行などで訪れた多くの外国人は、アメリ

カ人のその「明るさ」を高く評価していたはずである。そのアメリカも不機嫌になってきていた。日本も、特に、若者においてしかりであった。

この年、関西大学レスリング部は、創部30周年を迎えた。関大レスリング部は、昭和47年に、史上初の「2部落ち」を嘗めている。そしてしばらくは「部の存続も危ぶまれる」状態にさえあった。ようやく目鼻がついてきたとはいえ、往年の活躍ぶりには、ほど遠い。やはり「不機嫌」のムードが漂ってくる。一掃するために、関西大学レスリング部OB会は、総力を挙げて、「創立30周年記念式典」を挙行了した。そして記念事業の一環として『関西大学レスリング部創立30周年記念誌』を刊行することになった。式典では、「レスリング部」の活性化を期して、すべての願望の象徴である「記念部旗」が現役学生に寄贈された。

大学紛争を契機とした新しい大学とスポーツが建設されつつありますとき、わが部もまた再生のための厳しい試練を経験しながらも、なおしばらくは不幸にして停滞の域に留まっております。このさいわれわれは、あらためて創部の精神の原点に戻り、初心にかえって努力すべきこ

とを痛感せざるにはいられません……。 (高堂俊彌「序文」より・「30周年記念誌」)



写真▷「創立30周年記念部旗」

この年のリーグ戦は、春秋ともに、2部の第2位に終わっている。折角の「創立30周年」記念行事に応えることができなかった。「一進一退」の状態が続いたのである。だが「0からの再出発」で、致し方なかった面もある。しかしながらこの年「部員も23名に」と、希望を繋ぐ糸が徐々にだか太くなりつつはあった。そのあたりの事情を、「4年間の思い出」記に、訊ねてみよう。

◇

私が1年でレスリング部に入ったとき、先輩が5人ほどの小さな部で、「これから、ともにレスリング部を作ってゆこう」と言われ、先輩の人たちと一緒にやってみる気になったのでした。思い起こせば、厳しい練習というようなものは出来る由もありませんでしたが、毎日毎日を一生懸命に過ごしてきた気がします。先輩にも色々とお世話になりました。特に監督である伴先生には、お世話になったばかりでなく、人生について、クラブ活動について、相談にのっていただきました。おかげで私の学生生活も充実したもとなり、心より感謝いたしております。

クラブ活動のなかで印象深いのは合宿です。合宿も何度となく経験しましたが、最も苦しかったのは、1年の夏に広島で行われた合宿で、我が部と広島修道大学、桃山学院大学との3校合同合宿でした。合宿の終わる日だけを楽しみにした、苦しい毎日でした。しかし全員苦しい練習のなかから、強い体力とチームワークとを身につけて、大阪に帰ったのです。

春・秋のリーグ戦においても、我々が1年のときは、9人の選手を揃えるのが精一杯で、2部リーグの途中で健闘するにとどまりました。しかし、2年の秋には、待望の1部に復帰することができました。翌年には再び2部に落ちたわけですが、1部での試合は我々にとって、かけがえのない経験となったのです。残念なことに、それ以後のリーグ戦では、2部で、1位、2位を争い現在にいたっています。

しかしながら、部員も次第に増えて、今では20人を越えました。卒業にあたって、3年生が頑張ってくれるので安心してクラブを任せ、去ってゆくことができます。1年生、2年生も充実してきていますし、これからが楽しいクラブであると期待していただきたいと思います。

頼りにならない4年生でしたが、それゆえに、先生とともに、部員とともに、苦しみを、また楽しみを分かち合った思い出は、我々の心の中にずっと残るでしょう。過ぎてみれば短い4年間でしたが、我々は、この4年間でレスリング部を通して得た色々な教訓を社会人になっても忘れず、関大レスリング部を心の誇りとして、頑張っけてゆきたいと思います。(『関大体育会誌』)

◇

もちろんこの年の現役は、OBがごぞって、全力をそそいで、挙行した「30周年記念式典」と「記念事業」について、感銘と、伝統と、誇りとを肌で捉えながら、それぞれが肝に銘じて「自分史」

の一頁に刻印してくれている。この年の『関大体育会誌』の「本年度の活動を顧みて」欄の書き出しは、次の一文で、始まっている。その認識に、すべてが凝縮されている。

「今年の我が部の最大行事は、何と云っても、創部30周年記念パーティを6月11日に、新阪急ホテルにおいて開催したことである。」

2. 昭和53年(1978)・早慶関関戦

風俗・流行・歌 窓際族・嫌煙権 / 『不
確実性の時代』 / ♪『UFO』

昭和53年度『OB会のつどい』に記録されているOB会「昭和53年度事業計画」のひとつに、現役強化策が掲げられている。

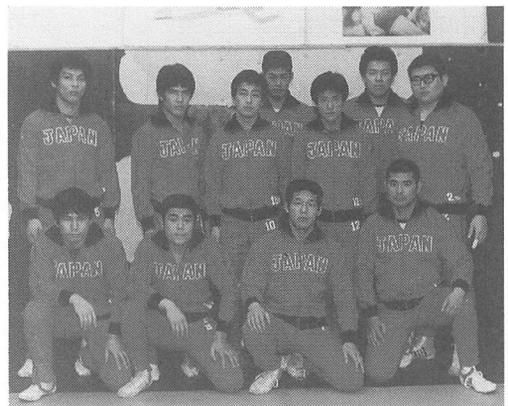
現役の強化を図る一環として、関大一高に働きかけ、同校レスリング部の「休部」に終止符をうつことを第一義として、熱意ある部長の就任を促し、よって選手層の拡大と育成に留意し、即戦力になる「選手」を大学に送り出すことで相互のレベルアップを期待する。(「OB会誌」)

さらにOB会では、その「強化ムード」の促進効果を企図するために、「昭和53年度春季リーグ戦2部優勝・1部復帰」に際して、「昭和53年度OB総会」で「表彰式」を企画している。その記録は次のとおりである。

輝かしい戦史を誇る当部が学園紛争により壊滅状態に陥り、廃部寸前に追い込まれた我が部を、往時を偲ばせ、希望の見いだせる現況に復活し

てくださった指導陣の功績を讃え、今後は、1部定着、1部優勝を念じつつ、感謝状に粗品を添えて、高堂部長、伴監督、藤田・佐藤コーチに表敬しました。ついで敢闘と技能において特筆すべき戦績の顕著なる西川主将、宮田副将、横山、小島、亀田の5君に敢闘賞を手渡しました。これに対し、高堂部長より、「今後ともあたたかい、息の長い応援をお願いします」との深謝の辞をいただきました。(「OB会誌」)

この年の活動状況はすべて、『OB会のつどい』誌の、「昭和53年度監督所感」欄に、残されている。引いておきたい。



写真▷「カナダ遠征」の西川・横山さん
(西川=前列左端・横山=後列右から4人目)



昨秋(昭和52年)は、2部リーグで優勝候補の最先端にありながら、中京大学に「5対4」で苦敗を喫した。たった2名しかいない4回生が就職試験期で練習不足、それがチーム力に跳ね返るといふ選手層の薄さが原因だった。またもや2部残留である。

部も充実

明けて53年、この年の4回生は充実しており、

西川主将、宮田・野口副将、佐藤、吉原、則包らの各君と、途中で戦列から離れた片岡、服部の両君と合わせて8名であった。特に則包は我が部創立以来初の女性マネージャーで、各関係者にその活躍ぶりを称賛された。

春、宝塚高校出身の亀田雅彦が入部してきた。つづいて関大一高の柔道部出身の重量級大倉秀光が入部し、滝川高校出身の西山光正ほか数名が入部したが、定着したのは「氏名」を記した3名のみである。(注：翌年になって2年生の奥部が入部している。)

1 部昇格

この春は、「カナダ遠征の主将西川と進境著しい横山の2名の重量級は抜群である。質、量ともに、2部優勝候補のナンバーワンである」と「学連の目」は語り、部の目標も「1部復帰あるのみ」であった。実際に亀田、米田の軽量級、片岡、西川の中量級、横山、宮田の重量級は1部においてもトップクラスの実力を有している。それに、野口、小島ほかの充実も著しいものがある。春季リーグ戦は、「1日平均3試合という2部リーグの殺人的スケジュール」をこなしながら、3日間を圧倒的に8戦全勝で乗り切った。

次いで入れ替え戦も、宿敵中京大学を「8対1」と一方的に敗って、1部昇格を果たした。活躍の目ざましかったのは、亀田、小島、西川、横山、宮田で入れ替え戦を勘定して、9戦全勝であった。彼らはのちにOB会より敢闘賞を受けている。特に亀田は、48kg級に、苦しい減量に耐えて出場した。その1年生の亀田が、入れ替え戦では、作戦上1階級うへの52kg級に出場し、中京大のピカー西日本学生チャンピオンの上田を、圧倒的に攻めたてて3ラウンドでフォールしてしまった。選手が心技体ともに充実したとき、チームが勢いのっているとき、実力以上の「力」を発揮する。

しかし、それも、裏打ちできる練習の成果があったことではある。この年は、特に5月に、強化練習として早朝7時～9時と、昼間の2部練習を行い、また個人戦前とリーグ戦前にも強化合宿を行った。こうした練習が実ったのである。選手たちが、この経験を、「あのように計画をたててやれば、目標が達成できる」と翻訳しなおして、向後の糧にしてくれればと願っている。それが、真の学生スポーツであろう。

底力の定着

秋季リーグ戦においては、強化対策も春と同じく行ったものの、1部の壁を一気に破ることができなかった。最大の原因は、ポイントゲッターであった2名が、戦列を離れたことにあった。軽量級の亀田が学資稼ぎのアルバイトの都合で休部せざるをえなくなり、中量級の片岡が退部してしまったのである。「この2名がいれば……」と、コーチ陣は唇を噛んだ。たしかに2名がいれば、1部の上位入賞も望める、近年にない、チーム力であったのである。部の経営にあたる監督・コーチ陣はともども頭を抱えざるをえなかった。こうしたことも学生にとっては、生きた経験材料となっているはずだ。そのなかで、作戦上、米田が、48kg級の選手として出場するために、苦しい減量をよく克服してくれた。併せてチームの牽引力ともってくれた。1部リーグでは惨敗であったのだが、入れ替え戦では、またもや中京大を「7対2」で敗り、関大の底力がやっと定着したことを実証したのである。長い、道程であった。

早慶関関定期戦

個人戦も、新人戦では、横山、亀田が優勝し、大倉が2位になった。西日本学生選手権大会では、西川、横山が3位になって、それぞれ活躍してくれた。本年度の特筆は、11月5日に、関西大学体

育館で開催された、第1回「早慶関定期戦」であった。これは関係者一同が、将来的に、東西4大学レスリング対校戦として定着させるために、立案協議してきていたことが、開花したものであった。ほかの競技にあっては実現しそうもない「4大学」のこの集まりを、大切にしたいものである。

この年の反省点は、亀田の「休部」と、片岡の「退部」にあたって、指導陣として最善の解決策を見つける努力をしたにもかかわらず、その「意」を尽くしきることができなかったことである。学生スポーツの難しさを、痛感せざるをえなかった……。(伴義孝所感「OB会誌」より)

◇

この年の3月、西川雅弘(昭和53年度主将)と横山博行(同2回生)が、カナダ・米国遠征に代表に選ばれて武者修行に出かけた。その成果は大いにあって、このところの、部の躍進に貢献することになった。ただ1部の壁は決して薄くはない。監督の伴義孝は、「上記の引用文」を、次の一文で閉じている。

◇

振り返れば、昭和48年に私が監督に就任したとき、「私のやり方で目鼻がつくまでやる」と計画をたてたわけであるが、一応のチーム力を育てることができた。それは、数名の高校時代のレスリング経験者に偶然に恵まれてのことでもある。いろんな要素が重なって、本年度は、近年にないチーム力をもつことができた。そして1部の壁にいま直面している。

この壁を破るためには、これから一工夫必要である。懸案の「一高」復活策も、そのひとつであろう。私を補佐してくれるコーチ陣に、また力強くご支援くださるOB会に、一層のご協力をお願いしたい。同時に、これから現役は、「窮して変じ、変じて通ず」ことを信じて、何事にも、やり

とおす意志をもってほしい。人生は、芸術である。レスリングに携わる関大関係者で、「関大の絵」を描きあげたいものである。(「OB会誌」)

3. 昭和54年度(1979)・七転八起

風俗・流行・歌 省エネルギー・文化センター／夕暮れ族／♪『関白宣言』

桜井主将、鹿浦副将、草壁主務、森崎の4名の4回生のもとに、この年は、「七転八起」の起伏の多い闘いであった。春は1部で全敗、入れ替え戦にも負けて、2部へ降格。捲土重来を期した秋には、2部8戦全勝で、優勝。そして入れ替え戦では、「5対4」で桃山学院大学に勝って、1部昇格。その様子を、4回生が「1部のまま後輩に引き継ぐことができたのが何よりだった」と述懐している。「監督所感」を引いておく。

◇

昭和54年度の主な戦績は次のとおりとなった。

「痛恨の試合」⇒ 春季リーグ戦「1部・2部入れ替え戦」で、「関大2-⑦桃山大」の惨敗。その結果の2部転落。

「ヤッタ!の試合」⇒ 秋季リーグ戦「1部・2部入れ替え戦」で、「桃山大4-⑤関大」の辛勝。その結果の1部復帰。

「実力発揮の試合」⇒ 西日本学生選手権大会「52kg級亀田優勝・82kg級横山優勝」(ともにグレコ)。

「油断の試合」⇒ 関関戦「総合関関戦」で関学に1点差の惜敗。

昨年は、メンバーも充実しており、1部定着の実力を持っていた。だが4回生の充実メンバーを卒業させて、今春は苦しいスタート。学連の目の予想は「ポイントゲッターの中重量級に多くの卒

業生を出したのは痛い。1部残留可能か」だった。我が部は主将をはじめ、「一致団結、上位進出あるのみ」を合言葉に、春季合宿をはり、藤田コーチともども特訓で乗り切る作戦をたてるのに懸命。少数部員のため、本年度も、48kg級に「助っ人」が必要で、拳法部の五島君の協力を得ることになった。

桜井主将以下部員一同が奮迅の闘いぶりであったものの、春季リーグ戦は、1部全敗だった。対同志社、対大体大戦は肉薄する善戦だったのだが、層の薄さを隠すことはできなかった。初日の対徳山大戦では小島が膝を故障して出場不可能となり、メンバー不足に拍車をかけることとなった。これがたたって、1・2部入れ替え戦においては、「痛恨の試合」となった。同入れ替え戦では、小島を欠くメンバーでは、勝ち目がなく、亀田を57kg級に起用して、相手のポイントゲッターを潰す作戦に出たのだが、裏目になってしまった。1部全敗の余韻が最後まで響いたのだった。

新人戦では、亀田(52kg)、大倉(82kg)が活躍した。また西日本学生選手権大会では、亀田、横山がそれぞれ優勝した。横山は全日本大学選手権大会の82kg級の5位に入賞、亀田は兵庫県の国体代表選手となった。本年度も新人の獲得に悩まされた。結局残ったのは、松岡、赤井、大黒の3名である(のちに赤井の1名になる。)

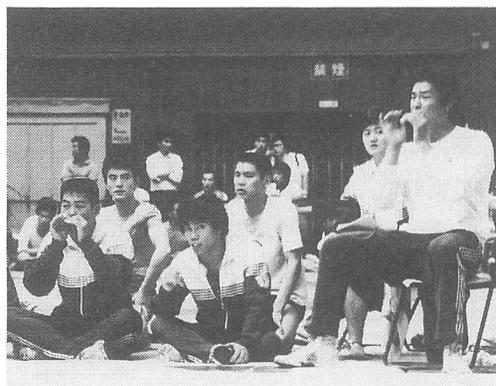
秋の1部復帰を願って、強化策を練ることになった。その方法は、夏期合宿から一貫しての強化練習であった。部員全員の東京遠征は特に効果があったように思われる。早慶関関定期戦(1位早稲田・2位慶応・3位関学・4位関大)をはじめ、大学選手権大会で試合経験を重ね、「技」を磨くことに専念した。その資金繰りのために、OB会の溝畑代表幹事を煩わすことになって、先輩諸氏から「合計10万円」のご援助を頂戴することになった。(指導陣として、紙上をお借りして、

感謝の意を述べさせていただきます。)

夏の合宿、東京遠征、秋の合宿と着実に強化を重ねて、秋季リーグ戦では、冒頭の「ヤッタ!の試合」となった。秋の特筆は、4回生の草壁だった。対中京大、入れ替え戦の対桃山大戦での、彼の健闘が光った。桜井主将は、2部優勝の原動力となったために、連盟より、「井川杯」を授与された。

本年度の反省は、1にも2にも、部員不足に尽きる。春秋に48kgの五島、秋には+82kgの天野(柔道部)を助っ人に借りなければならなかったのだが、その現状をいかに打開するかにある。

外部から眺めていれば、毎年、同様の繰り返しであろうが、その年の4回生や、その他の学生にとっては、1年1年が新しい経験である。これは、学生たちにとっては、生きた貴重な経験である。失敗をいかに反省するのかが、次のための鍵となる。そしてどうして成功を手中にするのかが、飛躍の糧である。現役諸君の一層の精進と、卒業生の今後の社会生活でのご健闘とを、祈念する次第である。(「OB会誌」)



写真▷昭和54年「七転八起」で頑張りました

昭和54年11月10日、戦後当部を創設し、また第2代目のOB会長を務められた山本雅之先輩が永眠された。生前のご尽力に感謝して哀悼の意を捧げたい。

レスリング部OB会の動向では、8月4日、「OB会運営の基盤確立のための具体案作成委員会」が開催されている。出席者は松井清、宇賀照夫、溝畑武夫、清谷利次、佐々木敏、宇賀大三郎の諸氏である。審議内容は次のとおりである。

- ▷ 新執行部を常任理事会として一致協力の隆盛を図る。
- ▷ 現役後援を目的とする資金要請をお願いする。
- ▷ 会費納入会員を拡大する。
- ▷ 会費節減を図り負担軽減をも期す。
- ▷ 同業、同趣味の会合を多くし親睦を深める。

この検討会が発端となって、OB会の充実と、後日の「OB会基金」設立に結びつくことになる。

4. 昭和55年（1980）・頑張れ現役

風俗・流行・歌 竹の子族・ヘッドホン／5無主義／♪『雨の慕情』

伴義孝監督が、昭和55年度をもって、勇退することになった。本務である関西大学の「体育教員職」に専念するためである。関大にあっては、この頃まだ、「大学紛争後遺症」のために諸問題が山積していた。同時に大学は諸改革の必要を迫られてもいた。監督辞退の申し入れはそのためである。その伴監督の最後の「所感」を引いておく。

◇

昨秋1部復帰、本年は横山主将、小島副将、山本主務を軸に、亀田を加えて、どのようにチーム

を構成するかがポイントであった。「学連の目」も「主将横山、軽量級亀田の安定したポイントゲッター以外に、あとひとつ、コマ不足、上位進出は難しいか？」だった。本年も部員不足を補うために柔道部の天野を借りねばならない。天野はこれで2年連続の助っ人となった。



写真▷昭和55年の「みんな頑張ってます」

主将をはじめ「カイザー関大の名に恥じない戦いをする」と春季リーグ戦は不退転の構え。だが、1部の壁は厚かった。あとひとつのコマ不足で最下位。1、2部入れ替え戦も涙をのむ。入れ替え戦の相手は、インターハイ優勝者をはじめ、多数のレスリング経験者を入れた名商大だった。「2部の台風の目」となって優勝。その余勢と、こちら（関大）の駒不足が、勝敗を決してしまった。

秋季リーグ戦も駒不足のために不本意な結果となった。だが個人戦は、横山と亀田が活躍して面目を保った。横山は、西日本学生選手権大会グレコ82kg級優勝、亀田は同52kg級優勝。そして亀田は全日本大学選手権大会フリー52kg級第3位を取った。その亀田は同大会で敢闘賞の栄誉を受けている。横山と亀田は「母校の名誉の顕揚と大学スポーツの振興に寄与した」功績を讃えられ、関西大学体育OB会スポーツ賞をも受賞した。

今年の第1の特色は新人が7名も入部したことである。いずれもがレスリング未経験者であるが、7名とも、チームワークのよい仲間たちである。彼らの今後の活躍に期待したい。

さて昨今「大学スポーツ」の話題が新聞紙上でも採り上げられて、そのあり方論議が注目されている。レスリング部OB諸氏も、学生スポーツのあり方には、ひとしお興味を覚えることだろうが、わが事になると、やはり「勝敗」を度外視することはできない。小生も「負けてばかりいる監督」として反省のみある心境だ。だが一方では、昨今の（関大）レスラーを見ていて、ある種の安堵感をもつことができる。それは彼らが「部の経営」を主体的に取り仕切るように成長してきているからではある。当たり前のことであるが、一度どん底に落ちた「団体」が主体性を取り戻すのは容易でない。だがそこでこそ彼らもレスリングを通じて生きた勉強をすることが可能となる。

小生自身も「強いチームを持ちたい願望」は、いままで口外することさえしなかったものの、人一倍もっている。だが願望と別に、「現実」を放棄することは、さらに許されることではない。

本年、コーチの藤田君が、西日本学連チームを率いて、カナダに遠征した。このチーム監督としての経験が、彼の今後のコーチングに、多大に役立つことだと思う。そして佐藤コーチとともに、一層のことに、関大レスリング部のために貢献してくれることだろう。併せて横山君が関西大学の職員として就職することになった。彼も仕事に余裕がもてるころになれば、コーチ陣に加わって、手助けしてくれるだろう。環境は整いつつある。本年度卒業の小島も、山本も、実社会で活躍してくれるだろう。その活躍が、現役の奮起を促すことは言うまでもない。

現役諸君の一層の精進を願って、昭和56年度を迎えたいものだ。関西大学レスリング部は「総合

関関戦」という名イベントをもち、また「早慶関関定期戦」というまたとない人の輪づくりの場をもっている。新しい大学スポーツは現役諸君の双肩にかかっている。（伴義孝所感「OB会誌」）



写真▷監督勇退の伴さんを囲んで・昭和55年
(左から=佐々木・伴・堀江・メイの各氏)

高校生の性格特性に「無気力」「無関心」「無責任」兆候が顕著にみられるようになった時代状況を揶揄して「3無主義」と表現した頃があった。昭和45年（1970）当時のことである。その3つの兆候に「無感動」を加えて、「4無主義」とも言った。その頃、大学紛争で、全国的にすさんだ空気が充満していた。高校生の「ヤル気」を衰退させる世相が、確かに、働いてはいた。関大レスリング部の衰退も、この「3無主義」「4無主義」の時代とともに、始まっている。堀江茂雄前監督時代のことだった。そして伴義孝監督が勇退することになる昭和55年（1980）には、新たに「無作法」を加えて、「5無主義」の時代だと評されることになっている。そのように、高校生や中学生にとどまることなく、大学生にも、いや世間一般へも、その「無の存在」風潮が蔓延しつつあった。

そんな時代精神のもとに、関大レスラーたちは、よくやってきたものだと、自己点検して、評価し

ておきたい。その関大「アンチ5無主義」レスラーたちを支えたのが、OB諸氏の「気概」であった。門をたたいた彼らと、呼応した「気概」が、一体となって、関大健児を鍛えたのである。この呼吸こそは、まさに、昭和23年創部当時の「精神」そのものにほかならない。

そのOBたち以上に、ウィリアム・メイ氏が、現役の「気概アップ」に貢献してくれたことを記しておきたい。彼はこの3年ばかりをボランティアで関大のゲストコーチを引き受けてくれた人物である。アメリカ人の彼は、大阪学院大学の英語講師として、当時大阪に滞在していた。手持ち無沙汰の彼は、ある日、関大の門をたたくことになる。かつて本国での学生時代にならしたレスリングでもして、生活リズムを調整したいと考えたのである。当初はそんな軽い気持ちだったらしい。ところが、関大のすべてに意気投合してしまって、コーチを買って出てくれたのだった。手本を学生に身をもって示したい。そのためには現役復帰して試合で実績を示したい。彼は、全日本選手権大会で、68キロ級の6位に入賞したのであった。その経緯を関大レスラーたちはつぶさに観察していた。刺激と教訓と手本が産まれる。

3年間という時間を、彼は、関大レスラーのためにもたらしてくれた。多くを、学生たちは、学びとってくれた。この頃、関大レスラーたちは、無気力、無関心、無責任、無感動ではいられなく

なっていたのである。さらに「メイ先生」との人間関係において、無作法ではいられない。ウィリアム・メイも、関大の実情を心得ていて、関大レスラーたちに接してくれた。彼の母校「ミネソタ大学」は、レスリングでは、3流大学である。そこでのレギュラーであった彼は、その現役時代の諸経験を交えて、関大の状況と呼応させながら、レスリング以外にも、いわば人間道ともいべき「何か」を、すべてにわたって与えようと努力してくれた。関大レスラーたちは、その「何か」に、直観的に魅せられていた。そして求めた。英語と日本語をそれぞれに工夫しながら交えての人間関係である。その「間」が、関大レスラーをして、「何か」を感得するために、鋭敏にしてくれたのだろう。とにかく、ウィリアム・メイ効果は、絶大だった。(このウィリアム・メイ氏の関連記事は「青春のパライストラ1980」前後の各節に見つけることができる。参照していただきたい。)

こうして現役学生たちは、我が関大レスリング部OB諸氏の「気概」に加えて、こうした幸運にも恵まれながら、これからも「何か」をみつけ、「何か」をつかみとり、「何か」をつくりあげてくれることだろう。「ひたすらに臥薪嘗胆」の時代にも、「一進一退」の時代にも、この「何か」が存在していたはずである。ただ「何か」は、そこどころがってはいない。「何か」は、掘り起こせば、みつけえるはずである。(完)